変わる日本の「暮らし」と「まち」

「人とまち、人と人」をニットで紡ぐユニークなイベントが開催

新虎通りエリアマネジメント ニットイルミネーション.in新虎通り
（2017年●平成29年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration:Shigeyuki Sakata

2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックを追い風に、さまざまな大規模工事が進む東京。なかでも、虎ノ門界隈は14年に虎ノ門ヒルズのオープンに続き、複数のタワービルが建つ予定で、交通の利便性も大きく飛躍する。20年には、東京メトロ日比谷線虎ノ門新駅（仮称）が供用を開始。新駅に直結して大規模なバスターミナルも新設され、BRT（バス高速輸送システム）が発着するなど、虎ノ門は新たなビジネス拠点、そして新たな東京の交通結節点として羽ばたこうとしている。

ニットでまちを編みくるむ

新しい虎ノ門の大動脈として、2014年に開通したのが、新虎通りだ。環状2号線の地上部道路として、新橋と虎ノ門を直結。歩道には、オープンカフェや常設のスタンドストアなどが建ち並び、歩くだけでも楽しい。将来的に環状2号線は豊洲まで延伸され、完成すると都心部と湾岸エリアまでを1本で結ぶ、新たな東京のシンボルストリートになる予定だ。

昨年のクリスマス、この通りがユニークなイルミネーションで彩られた。その名も「ニットイルミネーション」。きらびやかな電飾ではなく、鮮やかなピンクとブルーのニットが沿道の建物やフェンスなどにあしらわれ、虎形のモチーフがビルに彩りを添える。使用したニットの量は約500kgにもおよぶ。師走の冬空の下に、暖かでなごやかな風景が広がった。

このアートプロジェクトを中心となって仕掛けたのが、URだ。まちの活性化と機能性向上を図るための都市再生事業を日本各地で手がけている。新橋・虎ノ門では、新駅整備の事業主としてハード面を担うほか、ソフト面では再開発のコーディネートやエリアマネジメントなども担う。開発事業者や行政、地域の人々とともに、にぎわいの創造やまちの活性化に積極的に取り組んでいる。UR東日本都市再生本部の中津美咲は語る。

「今回のプロジェクトは、新虎通りのにぎわいを生むために新しい切り口で何かできないか、という発想から始まりました。地元組織である『新虎通りエリアマネジメント協議会』が、新虎通りを文化発信拠点にしたいというビジョンを持っていることもあって、アートを活用して多くの方に興味を持っていただきたいと考え、『冬・人をつなぐ』というテーマから、ニットに出会いました」

URとタッグを組んだのがハイパーニットクリエーターの力石（ちからいし）咲さんだ。編み物をコミュニケーションメディアと捉え、人と人、人とまちをニットで編みくるむアート活動を展開するなかで、方向性がぴったりと一致した。

「新虎通りの特徴は、古いものと新しいものの美しい対比だと思います。新橋側には日比谷神社があり、虎ノ門側には虎ノ門ヒルズがそびえている。そして、その間には発展途上のまちがあります。そこで古い建物はピンク、新しいところはブルー、工事現場や建て替えの決まっているエリアは2色の毛糸で編みくるむという方法で、2017年の新虎通りの新旧が色で見えてくる、というプロジェクトを考えました」と、力石さんはコンセプトを説明する。

ニットがまちを見るきっかけに

プロジェクトの本拠地となったのが、UR新虎通りまちづくり事務所1階にある「URTRA（ウルトラ）」だ。この施設は、新虎通りのまちづくりが円滑に進むように、情報発信とコミュニティー活動の拠点として2016年にオープン。サンフランシスコのカフェBICYCLE COFFEEを誘致し、イベントスペースとしても利用されている。

11月22日には、力石さんレクチャーのもと、学生たちが指編みニットでURTRA店内を装飾。24日からは地元を始め、多くの人が編みくるみ体験に参加した。同時に、URの中津たちは新虎通りに面した約100軒の建物関係者に装飾の許可を取るために奔走。通常業務に加え、自らニットの飾りつけを行うなど多忙な日々が始まった。

「1軒1軒プロジェクトの内容を説明しながら回るのは大変ですが、その分地域の皆さんとお知り合いになれて、URの活動を知っていただけるきっかけにもなりました。飾りつけをしていると、温かい飲み物やお菓子を差し入れしてくださったり、『がんばってるね』と声をかけてくださったり。事務所にいるだけだと気づかなかったことばかりで、やって本当によかった」と中津。

力石さんも「URさんは、地域の人と同じ目線でものを見ている『まちづくり』企業という感じがします。今回は、自分のアート作品をつくるというより、一緒にまちづくりの一環に関わらせてもらっている感覚で、すごく新鮮でした」と話す。

12月9日の最後のワークショップには、親子連れや大学生、美大卒業生など多くの方が参加。沿道のプランターなどをニットで編みくるんだ。クリスマスに向けて華やかに表情を変えたまちの様子を見て、参加者からは「まちが変わっていくのが面白い」「ほっこりして、かわいい」などの声があがった。

「このプロジェクトを通して、新虎通りの一体感が生まれた感じがしています。ニットがどこにあるかを探しながらこの通りを歩くことで、スマホを見ながらただ通り過ぎるのでなく、まちや通りを見るきっかけになってくれたらうれしい。『新虎通りに行けば何かある』と思われるようなまちにしていきたいですね」と中津。変わりゆく虎ノ門のこれからが楽しみだ。

力石さんと参加者が一体となって、沿道のプランターをニットで編みくるんだ

街に、ルネッサンス
UR
UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社